歴代墓誌銘にみる書法の変遷⑨

楊休墓誌

大業三年(607)
(隋時代)

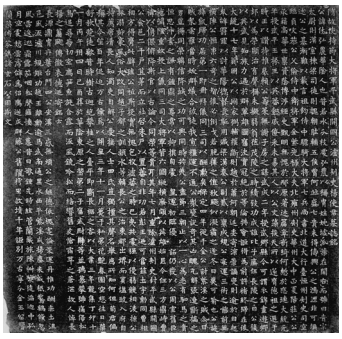
木雞室
伊藤　滋

図版②　「隋墓誌銘四種比較」

近年の中国の経済発展には目を見張るものがある。内陸の古都・西安でも開発が進み、地下からの文化遺産の出土も多い。今回の『楊休墓誌』も数年前の出土である。最初この墓誌銘の原石を見せられて驚いた。墓蓋と銘とが揃っており、銘文も傷みがそれほど無く、全体で三十三行、行あたり三十三字と規模が大きく、書風は整斉な楷書で、墓蓋の篆書の題字も二十五字ある。過去にこれほどの見事な揃いの隋時代の墓誌銘は見たことがない。同時代の『蘇孝慈墓誌』や『太僕卿元公墓誌』(大業十一年615)が三十七行、行あたり三十七字でこれより少し大きいが、共に墓蓋が伝来していない。後者は、原石が古くに壊れ清末に残石拓が伝来するだけであった。天下統一と共に隋時代の書風も更に発展し、初唐楷書に近い。『美人董氏墓誌』(594年)『蘇孝慈墓誌』(603年)『太僕卿元公墓誌』(615年)の三種は、この時代を代表的する楷書である。これらと今回の『楊休墓誌』とを比較した(図版②)。書風は、『太僕卿元公墓誌』に近いが、用筆面では『蘇孝慈墓誌』に通じるところがある。小楷の優れた手本となるであろう。この原石は、今も西安の個人の所有であると。

次号は、唐時代の『高福墓誌銘』です。

図版③　「銘文全体」

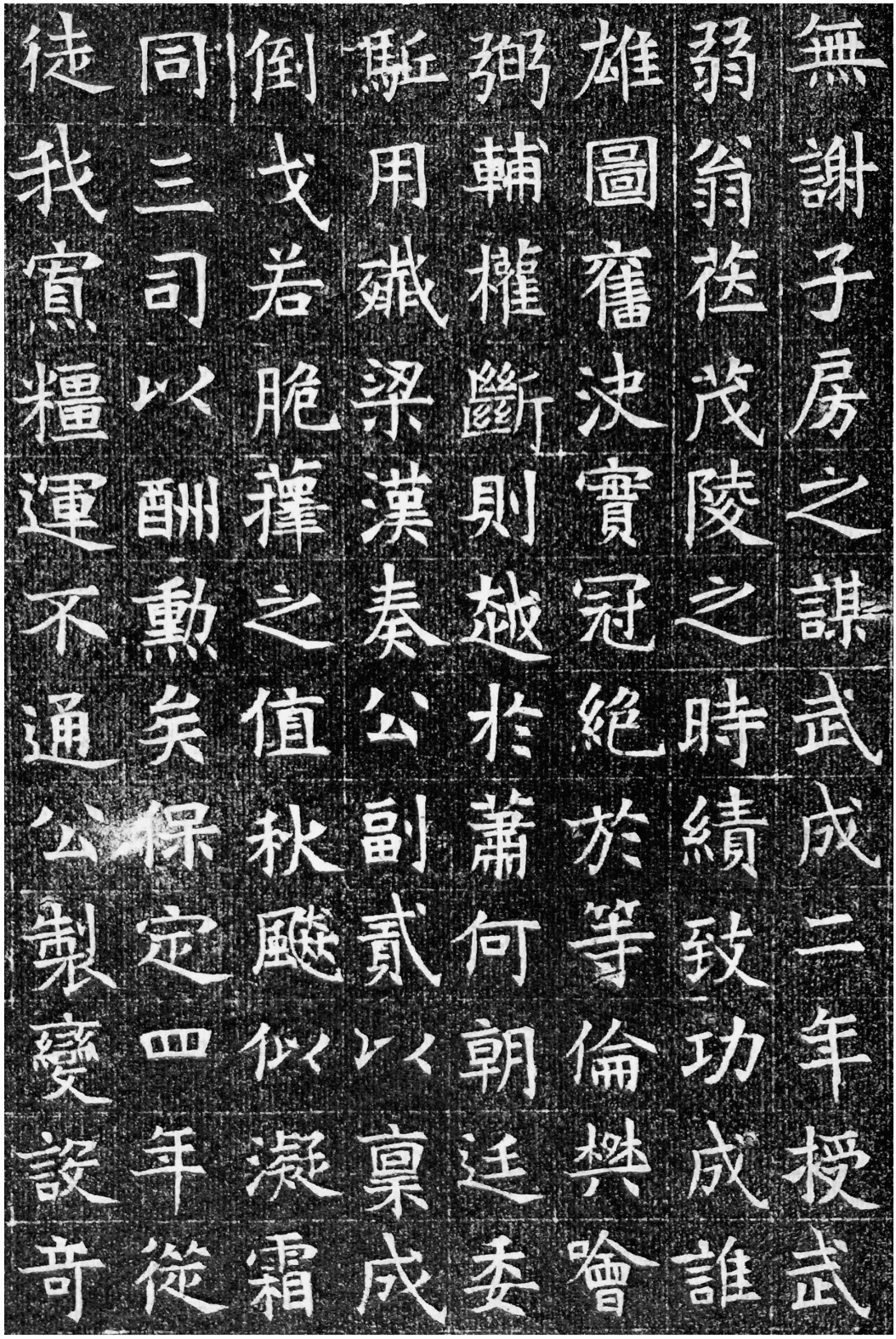


図版④　「墓蓋」

この欄に関するご批評、ご意見、ご希望、ご質問などをお聞かせください。私宛に直接メールで、また編集部宛にお送りただければ幸いです。

伊藤　滋　メールアドレス
mokkei@galaxy.ocn.ne.jp

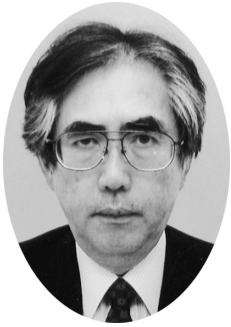
図版①



無謝子房之謀武成二年授武
弱翁佞茂陵之時績致功成誰
雄圖奮決實冠絶於等倫樊噲
弼輔權斷則越於蕭何朝廷委
駈用戚梁漢奏公副貳以稟成
倒戈若脆撣之值秋飈似凝霜
同三司以酬勲矣保定四年從
徒我賓糧運不通公製變設奇

（原寸）

書道芸術院
平成の群像（2011）



後藤大峰

「群　牛」

第62回書道芸術院展

荘子の一節に「五十九非」と言う語句がある。「六十歳になったら、過去五十九年の非を悟るべきだ。」と言う。昨年、還暦を迎え、その語句に素直に頷きざるを得ないのである。書を始めて約五十年（篆刻、刻字を始めて三十数年）未だに自分の作品表現が確立出来てないのが現実である。最近特に思うことは、創作の素材が篆書、特に自身が主に用いている金文は文字自体に時代的制約があったり、使用する文字自体が存在しなかったりでかなりの制限を受けることがある。そんな中での作品制作、どうしても自己中心的な解釈と作品自体への妥協でその場を凌ぐのが精一杯なのである。其れとともに篆刻、刻字においては筆意を刀意に変えなければならない、如何に線質を表出するのか、その時点でまた、困惑の始まりなのである。この様に篆刻刻字部門は文字を書き、印刀、鑿で文字を彫りさらに刻字においては彩色を施すとゆう段階を経ての創作なのである。この三重苦をこなしての作品制作なのである。師匠、千田得所先生は「練りに練った発想よりも瞬時に思いついたものの方がいいものが出来る…」とよくおっしゃって居られた。最近その言葉が少し理解できる様になったような気がする。練りに練った作品は大胆さに欠ける。反対に瞬時に思いついた作品は思ってもみないものが印面に展開するのである。しかし、如何せん浅学、気持ちに緩みがあったりすると、使い慣れた文字、語句を引っ張りだし、手短に、無難に事を終えてしまうのである。十年程前、師匠を見送ったのを機に新たなものに挑戦を始めたが壁にぶつかってしまっているのが現状である。新たなものを始めた時、何が良くて何がそうでないか模索の中で始めたつまりゼロでスタートした時のものが新たな評価を得た。これを今後の糧にして行きたいと思ってはいるが、自身もこれからどうなるかは判らないのである。

書のひろば

理事長　辻　元　大　雲

東日本大震災状況続き

未曽有の大災害となった3月11日発生の東日本大震災の被害状況は2か月を経過した現在も復旧の見通しも立たず、ますます過酷なことになっているように思われる。岩手から宮城の状況と、原発の致命的な破損による福島を中心とした地域は様相を刻々と変えつつある。今後どのような復旧、復興の手立てがなされるか、国や地方行政組織、東電を中心とする民間会社の死に物狂いの対応が求められるが、正に気の遠くなるような忍耐と努力が求められる。

東北地方に約三分の一の会員を擁する本院は今回の影響を直に受けており、他に先がけての対応が強く求められている。現在被害調査を事務局中心に精力的に進めているが、まだ全容をつかむことができていない。また、全国の会員の皆様より貴重な義援金も続々と寄せられており、本日（5月20日）現在約2600名の方から850万円を超えるご協力をいただいている。誠にありがたいことで、深く感謝申し上げたい。現在集約途中で5月下旬に第一次のまとめを行い、被災された方々への配分を行う予定である。今後ともよろしくご協力賜りますようお願いしたい。

平成23年度財団法人書道芸術院評議員会・理事会開催

三月開催予定であった評議員会・理事会が東日本大震災の影響で開催できず、書面での同意をいただいた関係から通常より議事内容が増加したが、予定された議案は全てお認めいただいた。

主な内容

・三月議案の承認（報告事項）
・平成22年度事業報告の承認
・同　決算・監査報告の承認
・平成23年度事業計画の一部変更および補正予算の承認
　東日本大震災支援金の支出
　同　被災者の年会費・出品料の減免
　65周年記念事業の変更（功労者表彰・海外展を見合わせる。）

◎東日本大震災義援金の集約
851万余円（2600余名の方々から）
1200万円（書道芸術院義援金）
計2050万余円から300万円を毎日書道会へ拠出する。
残り1750万余円より被災者の被害程度に応じて被災見舞金を差し上げる。

◎年会費などの減免について
被災された方々の平成23年度会費を被災状況に応じて減免の措置を取る。平成24年度以降についても状況に応じて考慮する。第65回展一般公募出品料についても同様とする。

これに伴って予算の減額補正を行う。

◎会員の被災状況
（A～CとX～Zダブりあり）
A　全壊または大規模倒壊　39件
B　半壊または床上浸水　45件
C　床上浸水または修理を要す　167件
X　稽古場閉鎖　26件
Y　稽古の再開見通し立たず　25件
Z　稽古休止、再開予定　16件
5月20日現在集約結果
被災者は350名を超すと思われます。

◎役員人事
3月末をもって任期満了の評議員改選に伴って新役員（敬称略）
新評議員　漢字部　村山元信
新参事　漢字部　千葉耕風
再任名誉顧問　小伏竹村・香川倫子
再任常任顧問　鳥山岳風
ほかは全て再任されました。

◎昇格人事
参与会員へ　大友哲郎・小山鳳来
常任総務へ　麻生峰扇、奥原翠嵐、川島舟錦（以上漢字）、前田まさ美（かな）、阿部珠翠、大隅晃弘、大森青風、佐久間ふく子、高田幽玄、中野黎峰（以上現詩）、林和鳳、柳町祥香（以上前衛）
総務へ　阿潟浜翠燕、大越墨扇、小野渓風、西古春堂、澤田如雪、田中恵泉、玉野浩水、山口美津（以上漢字）、福田玲子（かな）、秋浜翠江、伊勢紗由、及川豊流、大平房子、小沢華仙、小野由紀、桑原明珠、小出華雪、鈴元博貫、布施瑞弘、矢原春窓（以上現詩）、小山内景峰、木村貴衣（以上前衛）
審査会員へ（特別昇格含む）
上田多恵子、谷田熾箋、松村秀扇、井戸三扇、小林青峰、下村春香、三井白水（以上漢字）、岡部照芳（かな）、加藤紫翠、新宮文葉、及川祥空、澤田雙鶴、白地清柳、玉井瑶鼎、芳賀四秀、原博峰（以上現詩）、畑中玄石（篆刻）、藤原紅雲、小野寺三枝、佐々木祐子、高木百合子（以上前衛）
・審査会員候補・無鑑査昇格（次号）
その他行事予定などは院報を参照。

全日本書道連盟役員人事

去る5月12日開催された連盟通常総会にて、事業報告、会計決算のほか2年に一度の役員改選が行われ、理事長以下役員が決定した。（○は新任）

・理　事　長　○樽本樹邨
・副理事長　○石飛博光、清水透石
　○星　弘道
・常務理事　○関　正人ほか
・理事　○長野竹軒、○林竹聲、
　○日賀野琢、○船尾圭碩ほか
・監事　○竹田晃堂、○船本芳雲、
　○吉澤鐵之
・井茂圭洞前理事長、杭迫柏樹前副理事長は顧問に推挙された。
・本院からは辻元大雲が理事として継続する。

21世紀の書
―私の主張―

現代詩文書 (三)

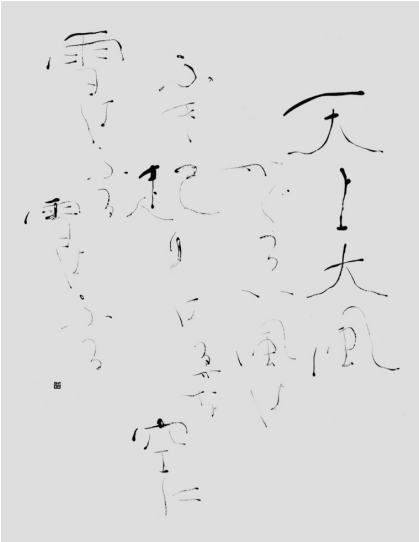
佐藤無極

淡墨にての作品作りはその後も試行錯誤の連続でしたが、その度ごとの墨色、滲みの変化に飛んだ線種に心引かれて、紙は手漉和画仙紙から本画仙、狭宣、二層、三層紙等々、筆も羊毛の超長鋒、短鋒、唐筆、兼毫、鶏毛、竹筆、ワラ、孔雀の羽根、馬、ネズミ、イタチ、等々、墨も又しかり青墨、茶墨等々種々取り組ましたが、ある一定の墨色を維持する程度のことは可能となりましたが、しかし墨色、滲みが変化に飛んだ線種を統計的に創り出すことは、季候、温度、湿度、紙の状態、硯の種類、磨墨の状況等々条件が多岐にわたり、確定的な法則はみつからず同じ様な条件の基において書いても、予想外の墨色、滲みの線種であったりして二度と同じにならず、一枚、一枚が勝負の作品作りでした。

偶然的な線種、墨色、滲みに引込れていき、だんだんといかにも自分が書けているかのように感違いをしていることに危機感を持つようになり、このままでは、淡墨の線も濃墨の線もこれより先へは進めないのではとの思いから再度濃墨による作品作りが主体となりました。

掲載作は第33回書道芸術院展出品作です。風通しの良い行間、粘り強い潤筆、透明度のある渇筆との考えのもとに書いたものでしたが、思い通りにはいきませんでした。

発表の折には、諸先生方より賛否両論をいただきましたが、その後の作品作りの転機となったものと思っております。



佐藤無極書

第33回書道芸術院展

かな (三)

大辻多希子

この数年、一年間に出品する展覧会の回数が多くなっています。

一つ一つの展覧会に、自分の書きたい書に向かって、ゆっくりと自分と向き合うこと、と師は指導して下さいます。

多くの作品を書くことにより、新しい自分が誕生するかもしれない、と思い胸が高鳴ったりもしました。

細字や中字作品の流麗さへの憧れもありますが、少し培ってきた漢字があり、大字作品を主として創作しています。かなの連綿と漢字の融合にはまだ試行錯誤が続き、完成の無い書の道を迷いながらの日を過している状態です。

脳科学者の茂木健一郎氏は、著書の中で、人間の「心」を支配する能の中で、大切なのは「意欲」である。もしも何の意欲も持たず、日々の創造を止めてしまったら、脳の発達も留まることになるでしょう。そういう意味でも意欲を持って日々の暮らしを送ることこそが、もっとも大切である。

意欲のないところに創造性は芽生えない。そして創造性のないところに、感動というものはやって来ない、と。

年令的にも節目となった今年、秘めた新しさを掘りおこすために、一つ一つの展覧会を大切に、作品に自分の想いを書き続けたいと考えています。

大辻多希子書

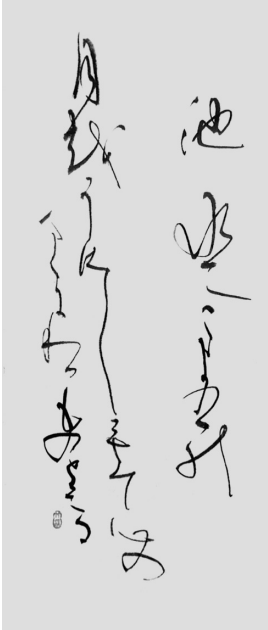
書話シリーズ 398

書との関わり

―昨日・今日・明日―

岩崎竹渓
（かな部・審査会員）

私は四国の最北端・源平の古戦場高松で生まれ、屋島のふもとの瀬戸内で幼少時代を過ごしました。書との出会いは、小学校の時書道に熱心な先生がおられ、香川県の競書大会に毎年大勢で参加し団体優勝の優勝旗を持って帰っていました。また、書家の炭山南木先生が父の友人だったので毎年夏休みにお願いして学校の体育館で指導を受けていました。実家に宿泊され夜は学校の先生も加わり書道談義をされていましたが私にはあまり理解できませんでした。その後社会人となり書からしばらく離れていました。転勤も何回か経験しましたが、転勤は地域文化に触れるよい機会でした。本社勤務（大阪門真市）になり生活が落ち着くと書にたいする想いが沸々と湧いてきて大阪で書道教室をみつけ仕事帰りに細々と続けました。その頃から書道芸術院展や毎日展にお世話になっていました。私は運動が好きで、テニスや水泳をやりながら、少年野球のコーチもして子ども達と試合に練習に熱くなりました。書道に必要な体力と持続力はその時に養われたのかも知れません。将来は書道中心の生活をしたく思い、小さいながら専用の教室を増築しました。64歳で退職を機に、今までの師と別れ、ご縁があって下谷洋子先生に師事させていただき目からうろこの連続の毎日です。先生のご指導を受け始めて、かな書の原点に芽生えることが出来ました。



岩崎竹渓書

漢字の習熟を土台に、かなを表現するための感性を磨くことの大切さや、線と連綿、行、面的表現をリズムよく、ボリュームある強い線で書くことが大切と思いました。先生が早口でさらりと言われる言葉をかみしめながら牛歩ですが、一つ一つ勉強させていただいております。また、書泉会の「泉」をいただき渓泉会という社中を開設しました。一般・学生にお手本を書く機会は多々ありますが、師曰く「手本よりよい作品はできない」と、時には、厳しく丁寧にご指導を受けています。また高松の友人から故郷で展覧会をやらないかと持ちかけられ、2008年の秋に、2回目の竹渓書作展と社中選抜展を併設で高松で行いました。折りしも源氏物語千年紀にあたり、源氏物語の和歌を素材に短冊による特設コーナーを設けました。大阪、高知、地元の友人たちが来場してくれ特に小学校時代にお世話になった恩師（車椅子でご来場）が、何回も会場を巡回して見て下さり嬉しく思いました。また、2010年10月、下谷洋子先生の個展（銀座画廊・美術館）に合わせ書泉会14人展にも出展させていただきました。平城1300年ということで、素材は、万葉集で秋にふさわしいもの「秋の七草」に決めました。記念ある展覧会ですので頑張って二曲屏風に仕上げました。

竹渓書展・社中選抜展会場風景

ある地域コミュニティ活動の会合で、地元小学校の校長先生から書写の授業をしてもらえないかとの要請があり、小学生の熱気とふれ合う機会ができました。定例授業と年初めに体育館で行う、書き初め大会などで今年9年目になりました。

私自身の楽しみの一つに詩吟があります。詩吟は緊張の中にも大声で出す腹式呼吸が体によい効用となって、昇級昇段もあり気の合う仲間とわいわいやっています。書道を通して会社時代と違った人々との出会いが意義深く新たな人生の喜びとなっています。

これからもさらに書の道への挑戦を続けてまいります。今回反省と回顧の機会をいただき有難うございました。

313

漢字研究部

九成宮醴泉銘（唐・欧陽詢）③

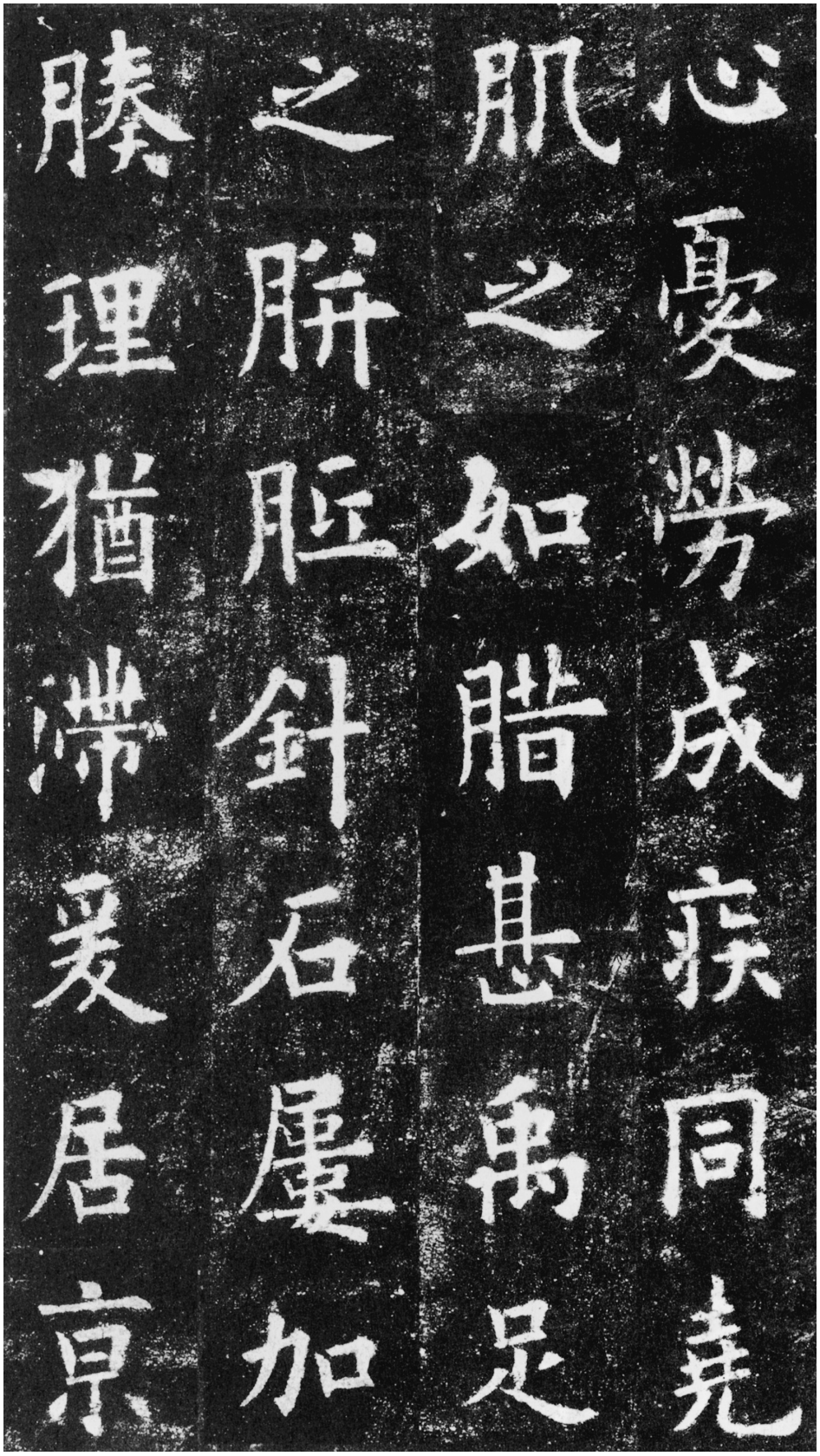
特別研究部臨書課題

＝（毎日展公募サイズ以内・縦横自由）左記の掲載以外も可

用紙　半紙普通判　左の法帖の中から何文字臨書してもよい。（掲載部分以外は不可）

※落款を必ず入れる
署名、もしくは
○○臨
（押印のみも可）

次回より「集王聖教序」



〈解説〉

九成宮醴泉銘は、背が高くスマートな作品である。右上がりの横画が峻険で強さを見せ、点、画一本一本が緊密でいささかの乱れも見せていないその姿は、冷たい感じを受ける。

胴をしめて背勢を強調しているが、よく観察すると、頭を伸ばし手足を伸ばすことによって窮屈さがなく、しかも、行間、字間が広く、明るさがある。

心。憂勞成疾。同堯肌之如腊。甚禹足之胼胝。針石屢如。腠理猶滯。爰居京

㊼ かな研究部　寸松庵色紙（伝紀　貫之筆）③

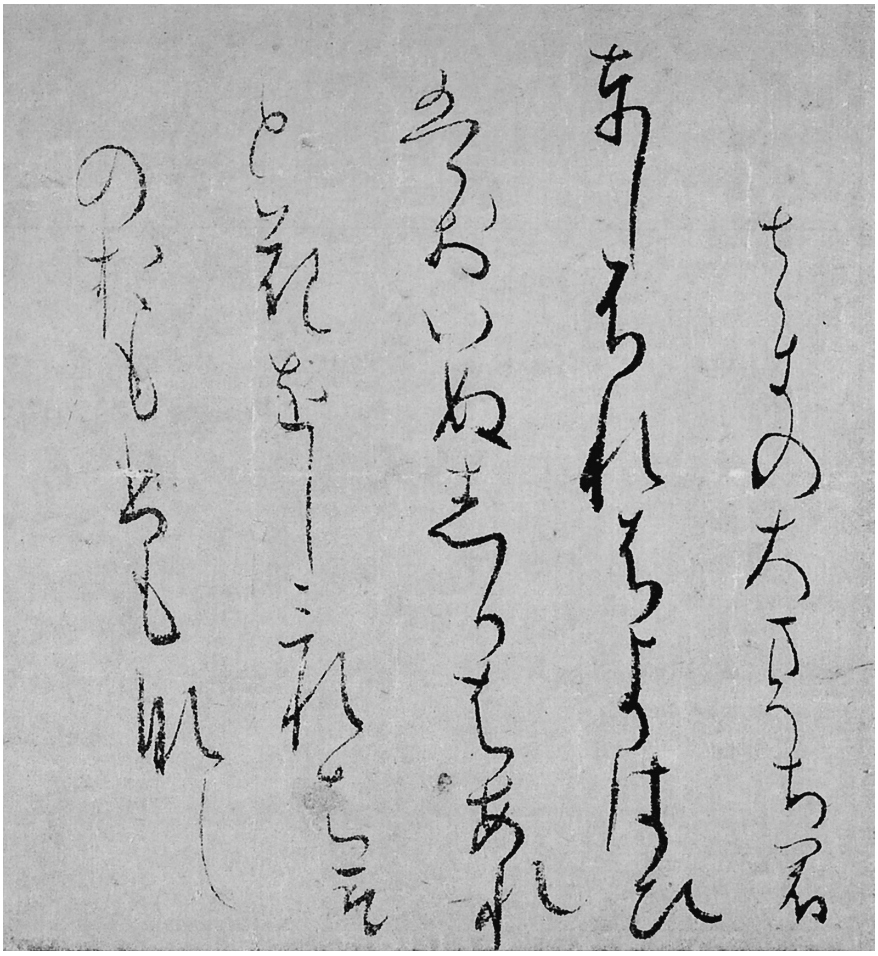
特別研究部臨書課題　＝（毎日展公募サイズ以内・縦横自由）左記の掲載以外も可

たて12.7センチ×よこ12.4センチの枠を半紙（料紙可）に書いて、その中に書く。（落款は枠内でも、枠外でも可。）

※落款を必ず入れる。署名、もしくは○○臨（押印のみも可）

用紙　・半紙普通判（**料紙可**）
〈**たて長**に使用〉
・別紙を裁断して貼付は不可。

＝**注**＝　寸松庵色紙は、上の掲載部分を**全臨する。**



〈よみ〉

さきの大まうち君（支万）
としふればよはひ（東不者）
はおいぬしかはあれ（盤志可者）
ど花をしみればも（三者毎）
のおもひもなし（於慾那）

次回より「針切」

〈**解説**〉

寸松庵色紙には、基本的に七形式の散らし方がある。前回、今回の形式は、高低式と呼ばれ、行の始めが高い低いの変化を繰り返す方法である。その他、逓下式（行頭の上下の凹凸がなく、穏やかな曲線をたどるもの）、分裂式（全体が二つの文字群となり、上下、あるいは左右に分かれている形式）などと分類されている。

前々月同様今回も、始めに歌の作者名を表記している。この方法は他にも多く見られ、単に作者名を記すというだけではなく、歌とともに全体で散らし書きの構成としてまとめている。従って位置も多様で、変体がなを交じえた文字の組合わせなども、歌に融合する表情となっている。

漢字規定　初段以上【七月十五日締めきり】用紙　半紙普通判

大野祥雲選書

学不可以已

よみ（学は以て已むべからず）

書体＝自由

習い方解説 (三)

大野祥雲

学不可以已　（荀子）

学ぶことは中途でやめてはいけない

「學」いわゆる書写体のため上部は大きく、下部は小さいが上部を支えるように力強い線で書く。

「不」横画に対し、二画目の始筆の位置と長さに注意。三画は柱となり、最終画はバランス上大切。

「可」本来この文字の最終画は縦長だが、ここでは他の文字と同じような字形にした。

「以」もともとの文字は扁平だが、全体のまとまりを考えて書く。

「已」一、二画を小さめに書き、最終画のまがりの線で白を抱くようにした。

漢字規定 秀級以下【七月十五日締めきり】用紙 半紙普通判

小竹石雲選書

身心一如　よみ（身心一如）

書体＝楷書

習い方解説（三）

小竹石雲

身心一如（正法眼蔵・弁道話）

造像記風の強靭な線で表現してみました。刻し方が端的なために、筆ではこのような線は出ないと思うかもしれませんが、その切れ味の印象を筆に託するつもりで、思いきって書いてみましょう。筆と紙との抵抗を強くし、深味と強さのある線になるよう練習してください。

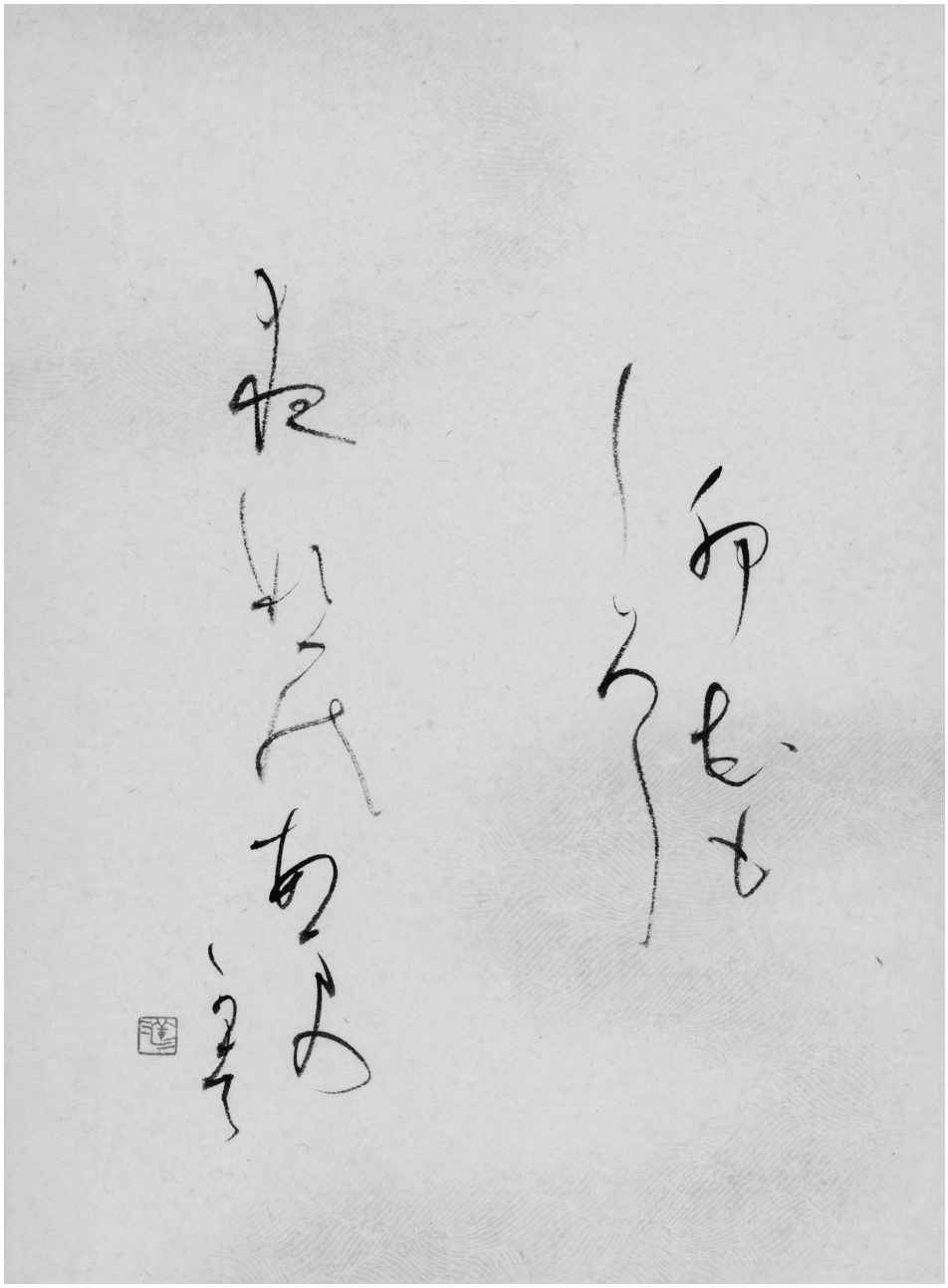
・**身**…最終画の左ハライは十分腰をすえ最後まで深く押しきってください。

・**心**…隣の「如」ともに扁平な字形なので「心」の最終画を少し右上に書いてみました。

・**如**…「女」を少々立てぎみにしてみました。

かな規定　初段以上【七月十五日締めきり】用紙　半紙普通判（料紙可）

下谷洋子選書



よみ方　卯花もしろし夜な(那)か(可)の(能)あま(万)のか(可)は(者)

創作

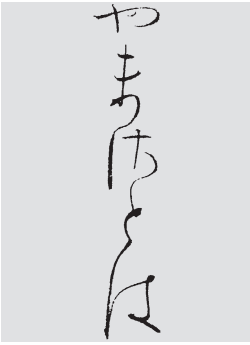
習い方解説（三）

下谷洋子

卯花も白し夜半の天河（言水）

創作するにあたっては、いろいろな方法があると思いますが、先ず書いてみる。原文のままでも、漢字をかなに置き換える、変体がなを使う…すべてかなは自由です。書いてみて自分の作品を検証します。かな表現にはタテ画が重要なポイントになります。ヨコ線は安定さを生みますが、かなの流れを出すためには何といってもタテ画が主体です。古筆でそのタテ画を見てみましょう。二本あれば必ず長さ・方向・強弱の微妙な変化があります。連綿の中で見ると、さらにその位置関係の変化に気づきます。ご自分の作品はいかがですか？同じ線が並んで流れるのは、却って不自然です。

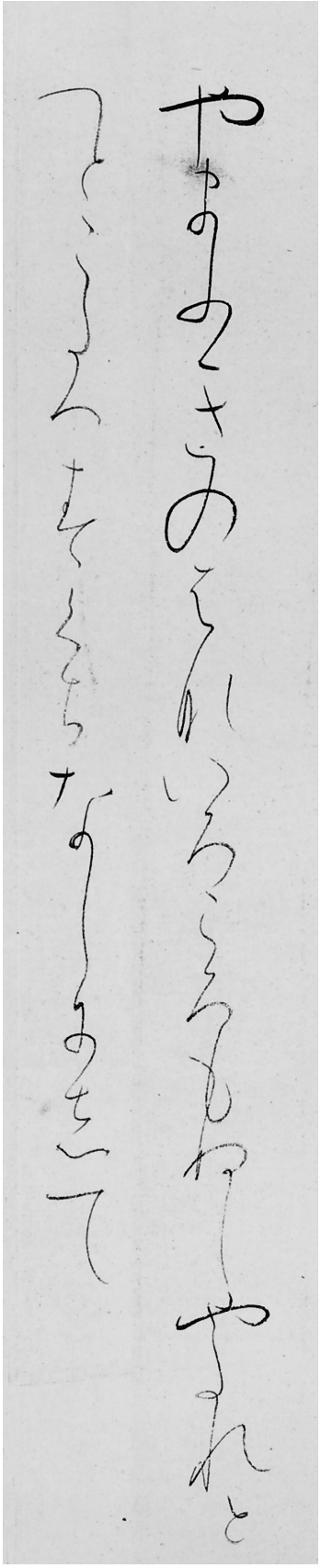
仮に結果がどうであれ、古筆の見方として知って欲しいことの一つです。



関戸本古今集より

かな規定　秀級以下　【七月十五日締めきり】　用紙　半紙タテ1/2（料紙可）（たて32センチ・よこ12センチ）

掲載写真のうたを全臨、または部分（二字以上の連綿）を臨書する。

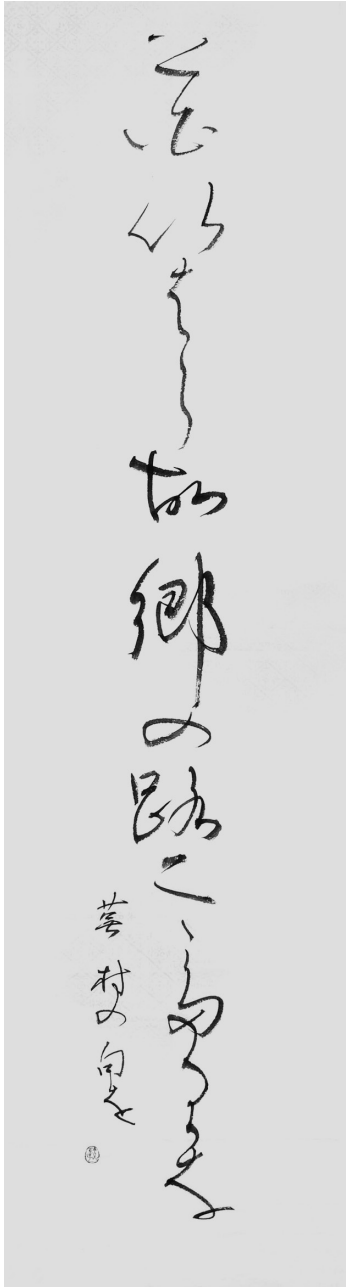


高野切第三種
（掲載写真縮小93％）

よみ方　やまぶきのは(者)な(那)いろごろもぬしやた(多)れと
へどこた(多)へず(春)く(久)ちなしに(尓)し(志)て

かな条幅規定　【七月十五日締めきり】　用紙　小画仙紙半切（料紙可）

天海矩子選書



よみ方　花い(以)ば(者)ら故郷の路に(二)似(ゝ)た(多)る哉(可奈)

創作

習い方解説 (三)

天海矩子

花いばら故郷の路に似たる哉
（与謝蕪村）

俳句は和歌より文字数が少ないので今回は一行書きで作者名を添える形式にしました。中央に画数のある字を使用して広がりが出せるようにし、紙の中心から書き出し行尾はやや右に寄せて作者名が収まるようにしました。ひと筆で書かずにどこかで墨つぎをしましょう。墨量に注意しすっきりと仕上げて下さい。

※たて形式に限る

漢字条幅規定　初段以上【七月十五日締めきり】用紙　小画仙紙半切

江雲帯雨涼生竹　野水迎潮暗入籬
（江雲雨を帯びて涼竹に生じ、野水潮を迎へて暗に籬に入る）

名越蒼竹選書

書体＝自由

習い方解説（三）

名越蒼竹

一回・二回と謹厳な書きぶりだったので、三回目は隷書体でも少し遊び心のある木簡風で書いてみました。もちろん八分隷でもよいでしょう。隷書体の特徴は一字の中に強調画があって波磔を伴うことが多いのですが、木簡には時々驚くほど強調した波磔が見られ、遊び心十分です。思い切って楽しく書いてみてはどうでしょう。

漢字条幅規定　秀級以下【七月十五日締めきり】用紙　小画仙紙半切

知足者仙境
（足るを知る者は仙境）

種谷萬城選書

菜根譚

書体＝自由

習い方解説（三）

種谷萬城

「心が満ち足りている者はどんな所にいても仙境にいるようなものだ」の意の語を、褚遂良・雁塔聖教序の書風で書きました。繊細で、多彩な筆法を駆使し、変化に溢れ、とても魅力的な楷書です。先ず、原本をじっくり鑑賞・臨書し、その魅力を味わい、感性を磨いて下さい。

ペン字規定【七月十五日締めきり】

上柳佳規選書

庭は青葉になりまた
まあこのトンに腰をかけ
さておもむろに わが庭の
風情をどこに求めよう

佐藤春夫「小園歌」より　佳規かく

用紙＝はがきの大きさ、白色のもの、黒インク使用のこと

書体＝自由

習い方解説 (三)

上柳佳規

黄緑や赤味をおびたやわらかな新芽は、日毎に彩りを変えて濃緑輝く青葉の季節となりました。

佐藤春夫の四行十一連詩「小園歌」です。

詩は、初夏から秋にかけて、思い出の花木に対して、若い日の感情から次第に老いて行くわが身の嘆声を秘めて、庭中の花木をうたっています。その最初の四行です。

「トン」は庭園におく陶磁製の腰かけ。

わが庭の風情となるので、余談で(私ごとで恐縮ですが)、わが庭は、猫の額、家の建替で更に狭くなり、とてもトンどころではありません。幸いに家が南に面した河岸段丘中段の南端で、南の斜面は西は中央アルプスの方から東は南アルプスの方に向けての森林帯です。

季節の野鳥が、わが庭にも挨拶して移って行きます。もう何年も前から出入していた高野槙から、この春は親鳥に促されて雛鳩の巣立ちが見られました。また、梅の花が散る頃から鳴き声も整った鶯は美声を張りあげています。

行書にしました。

伸びやかに書いて下さい。

※落款を必ず入れる。

(自分の名前を入れること)

今月のホープ作品 各部総評 NO.600

漢字部　師範　杉田　龍香

参考手本に工夫を加えているのが好ましい。落款も見事で、安定した実力の持ち主と見受ける。

◎漢字部総評　手本に似る楽しさ。似せない楽しさ。上級者は後者を身につけてほしいもの。どの段階でも古典学習を念頭に。（翠風評）

漢字条幅部　師範　小林　藤穂

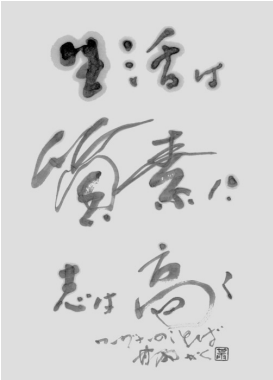
剛毫長鋒筆を駆使し、リズムよく爽快な作。やや粗さが目立つが沈潜させる用筆を心がけては。

◎漢字条幅部総評　参考例の楷書表現が多かったが、形にとらわれ脆弱な作が多かった。楷書は基礎力をしっかり養いたい。（大雲評）

現代詩文書部　特選　石崎　甘雨

墨色美しく横書きにふさわしい振幅のある動きが紙面を制し、躍動感溢れる楽しい作となっている。

◎現代詩文書部総評　上位作品には個性的なものが見られた。一作一作を大切にしよう。（石雲評）



前衛書部　特選　高橋　蘭花

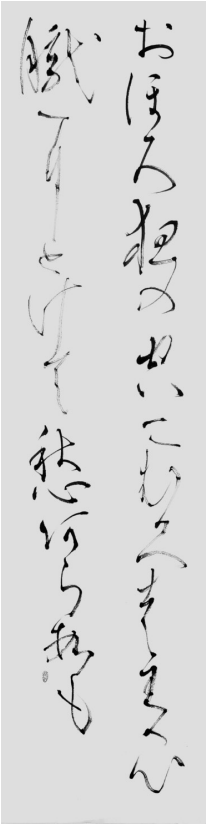
筆の穂先に神経が集中、余白をとりながら全体をうまくまとめている。特に造形が魅力的。

◎前衛書部総評　毎日展が近いこともあって、全体的に迫力があり、創作意欲が伝わる。（光昭評）

かな条幅部　師範　山崎　桜江

知的な線でまとめられた過不足ない作品です。その中に微妙な揺らぎがあり柔和で上品な世界です。

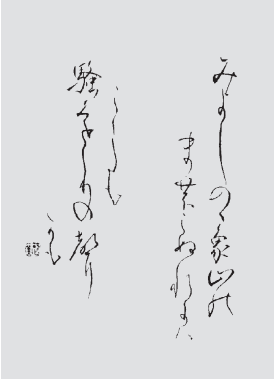
◎かな条幅部総評　変体がな者と漢字・朧の誤字が上級者にまで多出。手本と釈文を十分読み合せてから書く習慣にしましょう。（明子評）



かな部　師範　積田　雅雲

漢字の使い方の好例で、行草書がリズムの中で自然にかなと溶け合う。線質も見事。印の位置一考。

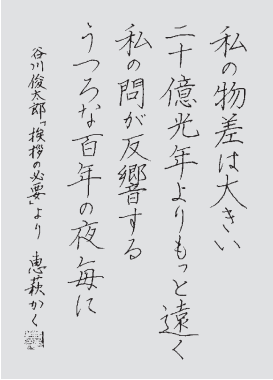
◎かな部総評　かなだからと言って細く神経質なのも見当違いですが、荒さはダメ！強くとも粗雑にならぬよう深い呼吸を。（洋子評）



ペン字部　師範　飯田　恵萩

堂々と力強い書き方で懐も広く、本人のこの一枚に向かう真剣さにエールを送りたい。更なる精進を。

◎ペン字部総評　比較的取りかかり易い題材だったようです。全般的に優れた作品が多かった。余白の取り方に注意を。（鄭街評）



今月の
特別研究部優秀作品（特選）

漢字（恵雅）

板橋雅邦

「紅樹青山」

板橋雅邦書

180×60㎝

◆穂先のきいた線の動き、淀みのない流れがピッタリ。墨色も艶やかで紙面によくあっている。（倫子評）

◆見る側に覚悟を求めるような力作です。姿勢を正して拝見しました。上手い。未完の美もありますよ。（明子評）

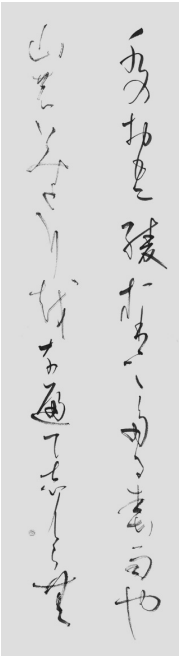
◆切れ味よく書き流すリズムが爽快で気持ちよい。二本筆使用か、やや破筆表現がうるさく感じる。（大雲評）

◆唐筆の先のそろったものを使用か？渇筆に切れがある。濃淡はよいが三行目の造形は今一点の研究を。（蒼玄評）

かな（AI）

藤村昌子

「水の面に」



藤村昌子書

170×46㎝

◆二×六形式に流れよく、二行構成に無理なく、潤渇のバランスよくまとめた。核となるポイント欲しい。（大雲評）

◆淀みない表現力でそつなく仕上げて可です。さらに深いものを伝えられる精神を磨く学習を期待します。（明子評）

◆淡々とした上品な作にまとまっている。筆の使い方も無理をせず余裕を感じる。特に二行目は白眉。（蒼玄評）

◆筆の流れと自分の心の流れが一体となって書かれた作品。大きな紙にかなの表現上手に合ってます。（倫子評）

岩崎陽光書　61×182㎝

現代詩文書（陽陽）

岩崎陽光

「河野裕子の歌」

◆文字のデフォルメの大胆さが独特の雰囲気を醸し出し、味わいある作。やや判読しずらい箇所要注意。（大雲評）

◆字形よく布置美しくスケールの大きな作品です。やや観念的な言葉を叙情的に描いて絶妙です。（明子評）

◆一字一字の造形には無理があるが、リズムでつなぎとめ潤渇が空間を広げている。最後の二行は一考を。（蒼玄評）

◆思わず口ずさむ楽しさを与えてくれます。筆の流れも踊るように活躍し、全体の纏りよくしている。（倫子評）

前衛書　（青蓮）

「優」　大町菜円

大町菜円書

180×60㎝

◆優しい墨色、切れのよい動きで明るく、しかも深みのある作です。過剰でない飛沫の役割がいい。（明子評）

◆墨色が彩かで清々とした感を醸し出している。上部の造形は少し重量感がほしい。印は小さ目がよいか。（蒼玄評）

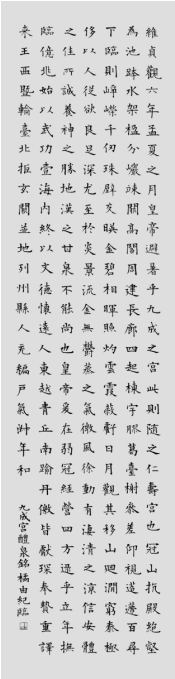
◆二つに分れた表現を大きな動きの中で一つに纏めて見せて呉れる。拝見していて楽しいです。（倫子評）

◆深みのある青淡墨の潤渇の変化が、大胆な運筆により増幅され、スケールの大きな作である。（大雲評）

臨　書　（うるいど）

橘　由紀

「九成宮醴泉銘」



橘　由紀臨

136×35㎝

◆入筆、終筆、気を抜く所なく最後まで張りつめた作となった。字形の厳しさが加われば第一級の作。（蒼玄評）

◆最初の一字から最後まで一貫した流れを保つ事は大変な精神力を感じます。印が作にマッチして穏やか。（倫子評）

◆ほぼ原寸大で、羅紋箋のきめ細かな紙質を活かした精妙な臨書。一貫した表現技術の確かさを感じる。（大雲評）

◆大好きな古典を美しく見せて頂き大満足です。動じない精神の持主か、書を学んでそうなられたか？（明子評）

現代詩文書　（八街）

三浦鄭街

「山頭火の句」

三浦鄭街書

176×53㎝

◆作者の人がらを偲ばせるような運筆どっしりとしていて魅力的です。墨色に輝きあるともっと素敵。（倫子評）

◆大胆かつ率直な表現に好感する。中央部の渇筆がポイントとなって効果あり。終末部やや中途半端。（大雲評）

◆短い言葉の深い思いを熱っぽく伝えていて見事。山頭火が筆を執ったら、こう書いたにちがいない。（明子評）

◆大きく空間を抱え雄大な動きには圧せられる。まさに飲中八仙を見る如き造形。一行目の墨継ぎは？（蒼玄評）

総出品点数 82点

創作の部（58点）
漢字―13点
かな―4点
現代―25点
篆刻―2点
前衛―14点
臨書の部（24点）
漢字―23点
かな―1点

〈特選候補者〉

（創作の部）

「漢字」
京橋　小林　椿寿
墨宣　小林　翠芳
千葉　松村　秀扇

「かな」
蓮紅　千葉　華紅
卯月　前田まさ美

「現代」
うる　今関　心華
八戸　市川　紫泉
東実　吉田　眞理

「前衛」
蓮紅　遊佐　紅雅
秀水　坂井　初江
四谷　角田　悠香
行徳　浅見由紀子

「篆刻」
墨宣　中山　無硯

（臨書の部）

「漢字」
うる　岩田　誠華
千葉　大内　熒軒
〃　村田　笑華
大阪　田中喜美枝

漢字研究部
（九成宮醴泉銘）

選評　辻元大雲

今月のホープ作品

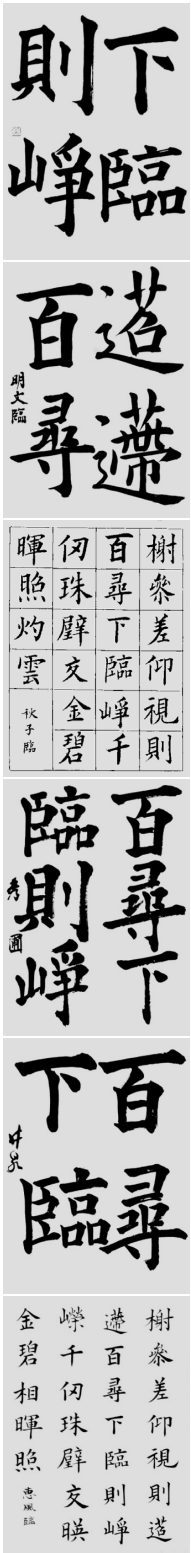
岩井弘晃

漢字研究部　特選　岩井　弘晃

ひきしまった背勢、清澄な線質の特徴をよくとらえ、安定した臨書作である。点画のバランスもよく、まとまりある作であるが落款やや軽すぎた感あり。さらに研鑽されんことを期待する。

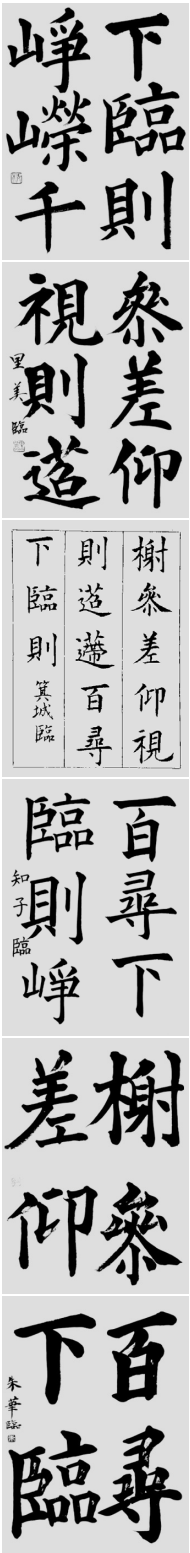
◎漢字研究部総評

楷書の極則といわれる欧陽詢の九成宮醴泉銘は、古典臨書学習の基礎として誰もが経験されていることと思う。欧法といわれる厳密な筆法や造形性は、一分の隙もなく完成度の高さを見せて、高度の技術を要求される。他の虞法や褚法、顔法といわれる唐代の楷書の特徴とそれぞれ趣を異にしており魅力はつきないが、こと欧法に関しては徹底した臨書学習を重ね、一点一画の用筆法や運筆のリズム、特に点画の構成のポイントを表現出来る基礎力を身につけたい。



美梢　明文子　秋子　秀圃　井泉　恵風

白香　恵子　百合子　佐和子　春景子　篁右



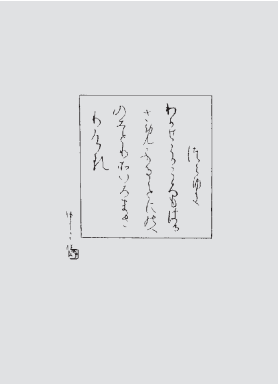
清耀　里美　箕城　知子　直華　朱華

麻矢　寿子　泰寛　楊風　静城　雅子

かな研究部
（寸松庵色紙）

選評　朝倉春江

今月のホープ作品



吉田佑子

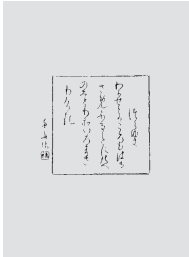
かな研究部　特選　吉田佑子

直筆の自然な用筆で、立体感と深みのある上品な作品です。連綿線が左右に動いて強さの中に温かさや厚みのある寸松庵の特徴をよくとらえ秀逸です。

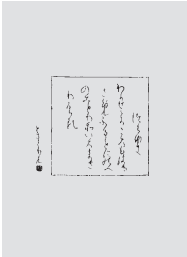
◎かな研究部総評

全体的によい作品が多くありました。しかし単体は忠実な臨書ですが、連綿が増すごとに特徴や線質、字形のくずれてしまう惜しい作品がありました。

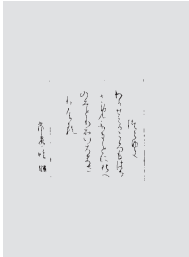
佳等清
栄興耀



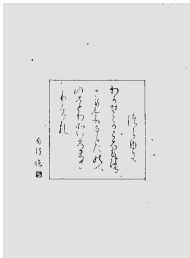
南桜惠
汀江舟



敏順時
子子子



龍彩嵐
博香泉



かな研究部成績表

特選

京橋　吉田佑子
卯月　新谷朋子
玉松　小川美佑
竜会　森永麗
泉泉　小林由
彩張　龍彩嵐
う る　時順敏
会会　時順敏
泉泉　龍彩嵐
帝塚　敏順時
大島　南桜惠
広畳　桜惠汀
幕祥　桜惠舟
北崎　桜惠江
伊村　清南子
木藤　清南子
永村　清南子
森田　清南子
小田　清南子
新川　清南子
谷　清南子
田　清南子
英峰　清南子
こだ　清南子
十尾　清南子
瀬本　清南子
吉木　清南子
鈴崎　清南子
都丸　清南子
飯橋　清南子
小田　清南子
高路　清南子
小美　清南子
木下　清南子
和山　清南子
遠田　清南子
金子　清南子
江田　清南子
西岡　清南子
北陸　清南子
清月　清南子
玉葉　清南子
如葉　清南子
千象　清南子
玄出　清南子
戸泉　清南子
竜葉　清南子
千葉　清南子
五泉　清南子
竜泉　清南子
英峰　清南子
こだ　清南子
帝塚　清南子
大島　清南子
広畳　清南子
幕祥　清南子
彩張　清南子
う る　清南子
泉会　清南子
竜会　清南子
玉泉　清南子
卯月　清南子
京橋　清南子
吉田　清南子
佑子　清南子
佑子　清南子
朋子　清南子
美麗　清南子
由生　清南子
佑宇　清南子
方井　清南子
橋高　清南子
大木　清南子
梓田　清南子
江井　清南子
Ａ春　清南子
Ｉる　清南子
澄阪　清南子
う〃　清南子
大〃　清南子
もく　清南子

秀作（60音順）

高陵会木勇介　千葉村葉華畝曜　松千葉村葉華　千正子子　秀子　木芳景　Ａ洲　容橋　前松　玉字　千華　正玄　艸代　倉吉　遊雲　秀水　卯月　泉会　英峰　竜葉　高陵　竜陽　調苑　昌峰　英峰　竜泉　高崎　竜泉　調布　生大　東向　千葉　こ汀　春澄
湯本　茂木　松重　松岡　増田　堀江　藤村　兵山　春本　橋守　永井　永澤　中田　中野　徳倉　寺藤　津田　田野　田中　渋よ　宍恵　佐藤　佐藤　櫻田　酒井　後藤　木村　北又　菅野　神谷　加藤　沖佐　小川輝峯
禮子　翠芳　翠景　律子　伊勢子　幸泉　昌子　玉泉　勝美　紅霞　宏薫　雅枝　よ子　渓子　悟仙　幸子　可三　蒼子　愛華　和子　初香　桂香　龍貞　恵子　良泉　翠蕉　春峡　静代　雲卿　翠陽　和子

佳作（60音順）

八街　竜泉　佐原　高崎　竹美　やま　玄象　五葉　千葉　硯水　もく　石習　石阪　書径　大雲　咲舟　春汀　澄春　千葉　高っ　澄陵　竜春　立泉　青精　顧峰　咲緑　八舟　八生　石雲　生習　竹大　椿美　大翠　帝雲　正塚　千華　彩字　蘭鼎　英峰　広島　豊田　泉会　澄春　東総　前橋　竜泉　うる　ＡＩ　高崎　生大　行徳　松村
熱田　浅みな　秋山　青木江　横山　山口　守屋　森田　村田　宮澤　松本　松丸　松佐　前田　堀切　藤本　藤井　深堀　平山　浜田　丹羽　浪川　土谷　千ま　高橋　志水　清水　篠田　七條　佐藤　佐藤　櫻田　小林　高武　木村　木原　北川　岸田　片崎　香野　小川　小野　宇寺　薄高　碓田　井村　今田　今関　伊藤　新井　新美　浅井　阿見　久由　澤紀　隆子
紅彩　蘭舟　律子　順子　睦子　笑華　草秋　藤倖　愛石　白谷　幸鈴　幸子　松雲　晴啓　清子　彩洗　と華　美子　恵子　秋子　つ花　白江　千香　美代　起子　正子　正子　裕美　佐子　彦二　智舟　晃代　玄城　争子　輝遊　東祥　優子　美代　冨子　玉華　西鈴　春華　春緑　貴弘　心華　寿子　知枝　廣子　久子　澤華

入選（60音順）

土気　生う大　〃　明漢　生大　た葉　湘か　春南　硯汀　昌水　洞苑　澄書　春街　やま　う る　竜泉　京原　八橋　高街　調崎　東布　竜小　広島　詢扇　昌苑　生大　四谷　蓮紅　鬼高　艸玄　誉H　椿田　秀翠　千明　葉〃　こだ　昭微　石習　た か　秀明　誠和　〃　千葉　も く　華祥　生大　正華　岩沼　〃　大阪　遊雲
杉田　進藤　新幸　社寿　嶋与　島田　紫雲　猿渡　佐藤　佐々木　佐木　坂詠　酒井　齋藤　斉藤　齋か　齋藤　後裕　近知　古松　小野　小美　小加　小林　小藤　熊谷　木藤　君元　北島　牧扇　菊村　神池　亀田　加井　小野　岡田　大森　大槻　大石　梅原　宇野　内田　岩野　岩崎　入谷　今花　猪関　梨又　理倉　板垣　板ひ　石橋　石橋　石崎　生駒　池田　新井　安部　明藤
麗子　寿子　三郎　祢和　和子　煌月　冬華　雅子　麗苑　花雪　翠香　桂子　つえ　裕美　知子　松春　蹊翠　加子　雅子　ぁ　さぁ　豊美　紫蘭　香苑　桃蘭　春翠　秀子　玉蓮　典子　紫風　真澄　理絵　十夜　喜代　幸江　星祥　虹祥　華泉　皓泉　春燈　洋子　悠花　梨霞　理扇　藤竹　青鳳　知子　正子　萩花　萩渓　瑛美　明隆

選外177名氏名略

芳蘭　春汀　大阪　こだ　明漢　吉田　ふみ　蓮紅　竹扇　高陵　佐倉　玉川　も く　紅苑　英峰　生大　澄春　椿翠　白子　五葉　澄春　高陵　泉会　秀水　や翠　玄阪　大蓮　幕張　有秋　秀水　東向　秀畝　小汀　小畝　一葦　春汀　千葉　秀水　森地　大泉　湘南　明漢　有秋　椿辺　渡葉　五澄　澄春　紅瑤　紅瑤　紅瑤
渡遼　渡遼　六波　吉野　吉田　吉千　吉田　吉富　遊美　山紅　山雅　山口　谷裕　森田　茂木　村山　村田　宮内　三上　三浦　真タ　増庭　田華　前花　北條　福和　島田　平歌　日比　比田　林　浜本　永シ　瀬島　長川　畠山　谷里　東智　芝香　和子　蓉汀　一水　中琴　中村　戸塚　絢子　富澤　東理　積惠　田舟　田子　雅絹　辻雲　田丸　田中　武山　竹森　竹ふ　高正　高野　高百　砂木　須川　鈴木　洋香　智舟　広
信溪　貞子　野玉　千祥　鶴子　翠綾　美子　炎雅　明秀　毅子　裕谷　藤蘭　真峰　龍蘭　幸平　満子　裕子　静子　ミ子　華秀　清次　麗子　靖子　歌和　湖舟　琴清　ェ華　ズ子　里香　山子　谷汀　瀬蓉　永江　島水　長琴　中一　村絢　塚子　澤舟　理子　惠子　絹子　雅雲　洋子　貞江　文枝　芳子　弓子　森子　ふみ　さ子　正子　杏華　合子　華子　洋子　香舟　智広